

2019 年度 A セメスター

火曜 5 限

ことばと文学Ⅲ

「日本語史の未解決問題」

担当教員：矢田勉

<はじめに>

このスライドは、2019年度Aセメスターのことばと文学Ⅲの授業プリント、授業中の説明をまとめ直したものである。プリントに補足した情報は基本的にはネットや書籍で確認した上で記載しているが、教授の口頭による説明が大半であり確証がとれないものも多いためシケプリのみに頼らず常に書籍などで確認を行いながら学習を進めてほしい。

また、出題範囲は異なるが音韻などの基本事項について昨年度のシケプリが非常によくまとまっているため、時間がある人はこちらも参照されたい。

<https://todai.info/sikepuri/search/show.php?id=1874>

<目次>

第1回	日本語史とはどういう学問か	p.2
第2回	上代特殊仮名遣	p.10
第3回	上代特殊仮名遣をめぐる未解決問題	p.13
第4回	奈良時代語と平安時代語	p.16
第5回	奈良—平安の相違をめぐる未解決問題	p.21
第6回	第6回 片仮名・平仮名の誕生	p.24
第7回	平仮名・片仮名の誕生をめぐる未解決問題	p.28
第8回	平安時代以降の音声音韻変化と未解決問題	p.31
第9回	省略・謝罪	p.35
その他	2019A セメ試験問題・授業内課題	p.36～

Sセメスターの過去問を見るに、実際に原文を提示し発音などを問うものが中心に見られるため日本語史自体の初回の授業は出題範囲に含まれる見込みは薄いですが、形式上第一回からプリントごとにまとめていく形をとる。

P.S.

2019年度Aセメの実際の試験では、3行程度×10問の論述問題であった。最後のページに問題の写真も添付している。

第1回 日本語史

1. 日本語史とは

(1) 基本的な目的

各時代の言語の**共時態**を明らかにすること

……ある一定の幅をもたせた期間での言語の共通性を探る

言語変化の**通時態**を明らかにすること

……when/what/how/where・why を考える

(2) 応用的な目的

過去の文献史料を正確に理解すること

現代の共時態（現代語）の構造についての why を明らかにすること

2. 日本語史の諸分野

かつては (1) 時代による区分が主流であったが、近年は (2) 言語要素での区分が主流である。(1)の方が史料の共通性はあるが、(2)の方が研究の方向性が近くやりやすい。

(1) 時代による区分

古代語：奈良時代語（万葉仮名）・平安時代語

奈良時代以前も日本語につながる言語がなかったとは言えないが、縄文・弥生・飛鳥はほとんど史料がないため奈良時代からがやっと日本語の姿がわかる時代とされている。

近代語：中世前期/後期語・江戸時代前期/後期語・近代語

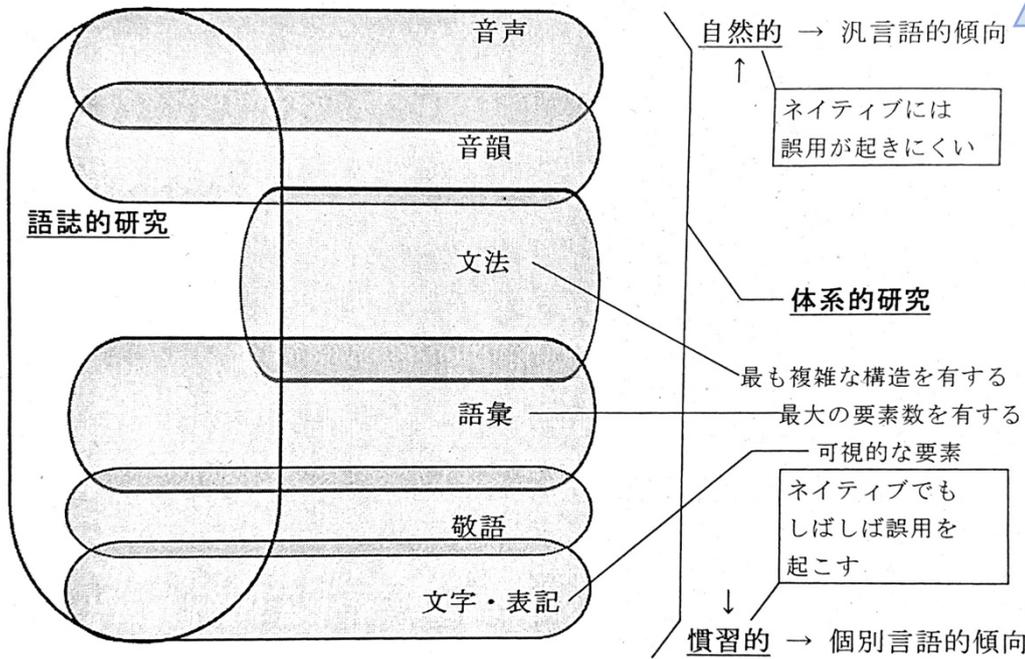
院政期（平安末）に文法面で大きな変化が起こり、ここを境に古代語と近代語が分けられる。

e.g. 希望の助動詞の変化

まほし[未然形接続]（平安まで）→たし[連用形接続]（平安末期以降）

希望を述べる場合まだ起こっていない事象についてであるため未然形接続になるのが理にかなっているが、平安末期以降は連用形接続に変化。近代語になると助動詞が本来もっていた役割やルールが崩れてきてしまった。

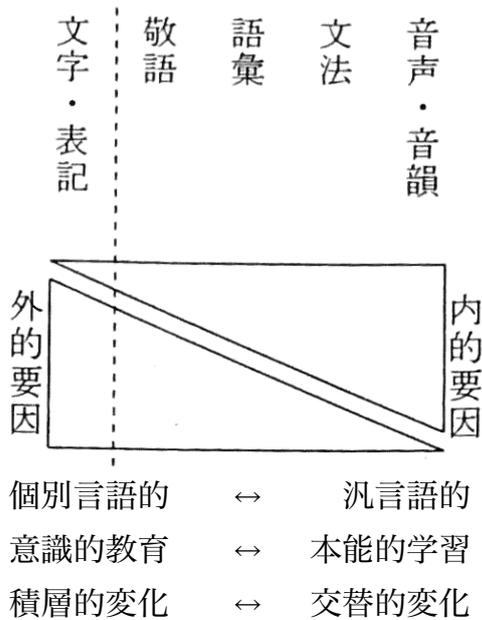
(2) 言語要素による区分
音声史・音韻史・文法史・語史など



基本的には、自然的言語要素になるにつれて言語間の距離が近くなっていく。肺から口までにかけての限られた器官の用法に基づくため、音声などの要素数は少ない。

意識して身に着けることが必要な要素

言語要素と変化要因



自然的な要素（音声・音韻など）になるほど、言語変化を起こす要因として内的要因が多くなる。逆に、人工的な要素になるほど、変化の要因は外的要因が多くなる。

e.g.

- 撥音（ん）、促音（っ）、拗音（キャ）などの文字・表記要素は本来日本にはなく、中国などから来た外的要因による変化である。
- 近年のアクセントの平板化などの音声・音韻要素の変化は、内的要因によるものである。

3. 日本語史研究の難しさ

(1) 過去のある特定時点の状態（共時態）として把握することの難しさ

(ア) 資料の欠如

飛鳥時代語以前、鎌倉時代語、非中央語、民衆語、幼児語など

特に鎌倉時代語は、ある意味奈良時代語より未解明である。鎌倉時代に書かれた文学は多いが、新古今和歌集、説話集、軍記物語など擬古文による平安時代語を用いたものが多く鎌倉時代に使われていた言葉をそのまま示す資料は少ない。

また、平安時代の資料からは貴族の言葉しか読み取れず、民衆語はわからない。

(イ) 音声言語と文字言語の相違

撥音を表記しない、現代の「は」を「wa」と読む違いなど。

(ウ) 文献に混入する文字変化

平安時代に書かれた書物でも、残っている原本がその時代に書かれたとは限らない。実際に、古事記の最も古い文献は室町時代に作られた写しである。

『宇治拾遺物語』宮内庁書陵部蔵写本

今はよも鳥にとられしとて外にいてゝ…… (中略)

月比ふる程にみなよく成にたれば悦てとに取りて

『宇治拾遺物語』江戸前期古活字版

いまはよも鳥にとられしとてほかにいてゝ…… (中略)

月ころふるほとにみなよくなりたればよろこひてとにとりいて……

江戸時代出版するにあたって漢字をひらがなにする際、

外(と) → 「ほか」

と誤った読み直ししてしまった。「ほか」という言葉は室町時代頃から発生した言葉であり、宇治拾遺物語が成立した鎌倉時代には外を「ほか」とは読んでいなかったと考えられる。

※外(そと)読みはさらに新しく、江戸時代中期以降である。

(エ) 「なぜ」に関わる難しさ

共時態である現代語ならまだしも、通時的变化自体の「なぜ」を明らかにすることは困難である。また、外敵要因より内的要因によるものは記録に残りづらく一層難しい。

● 言語変化の要因に関する言語学者の立場

—————体系はそれ自体では不変である

F.de ソシュール『一般言語学講義』

構造主義言語学を打ち立てた学者。言語変化はするとしてもすべて外敵要因によるものであり、変化する理由は問題にならない、と主張した。

—————社会関係がますます複雑になることで、それに対応する媒体としての言語機能がどのようにその複雑さを増すか…… (中略) …新しい社会的要求や伝達上の必要性が求める再組織化に対する、言語の執念深い抵抗… (後略)

A. マルティネ『言語機能論』

文法の変化は、社会の複雑化（外的要因）によるものであると主張した。古代の言語は狭いコミュニティで使われているため文法構造を阿吽の呼吸でわかりあうことが可能であったが、人の移動が激しくなった現代では、「てにおは」などが詳細に決められた。現代でも友人同士など小集団の中では古代同様省略される傾向がある。

—————音韻変化を言語体系の枠内で考察すると、すぐに分かることだが、初期の西ロマンス語の子音変化はすべて、究極的には、重子音の調音が必要とするエネルギーを、その情報価値と匹敵する量にまでへらす、経済上の要求によって条件づけられているようにも思われる。だからと言って、他の要因が働かなかった、というわけではない。

A. マルティネ『言語機能論』

音韻変化は、話す際に楽な方向に変化していくと主張した。

—————言語には共時態と通時態（機能行為と変化）の二律背反は存在しない。というのは言語変化（＝言語の歴史的構成）は、本質的には機能することの様態であるから。規範において変化であるものは体系の観点からは機能行為である。……（後略）

E.コセリウ「共時態、通時態および類型論」

言語の変化は、内部からより便利な文法システムを作り出そうとして変化したと主張した。例えば、ら抜き言葉は規範的には間違いとされるが、一方で「れる」という表現をつくることで可能を受身や尊敬の「られる」と明確に区別する機能をもつと言える。

● 外的言語学的要因

(i) 言語を取り巻く社会の変化

e.g. 開いた表現→閉じた表現へと変化

(ii) 事物の抽象化の基盤となっている思想・感受性などの変化

e.g. こと→言語間・事物観が変化し、言葉と事物を区別するようになったかつては「こと」が言語・事物双方を表し区別ができなかった。

(iii) 事物そのものの変化

e.g. かつては「そば」という言葉しかなかったが、麺類の多様化により「そば」は麺類一般を指す語となり本来のそばは「日本そば」と呼ばれるようになった。

● 内的言語学的要因

(iv) 言語の構造的不完全性

異義同形態（同音異義語）の存在

e.g. なり（断定）/なり（推量）

非対称性

e.g. 前（時間・空間）↔あと（時間）/うしろ（空間）

(v) 省力化の傾向

e.g. 知っている→知ってる

(オ) 通時変化の実態把握の難しさ

変化：短期的なもの（事件）と長期的なもの（推移）があるが、言語変化は基本的に長期的な推移である。長期的推移は5W1Hの記述がより一層難しい。

(2) 特定の言語要素に関わる難しさ

(カ) 文字によって映像的に固着された音声を復元する難しさ

音声：ネイティブにとっては同じ読み方だと感じるが、詳細に見ると異なっている発音の違い

音韻：ネイティブが明確に使い分けている違い

e.g. シンに含まれる「ン」の発音

新郎：	音声 [n]	} 全て音韻としては、/N/
新聞：	[m]	
新刊：	[ng]	

(キ) 文法

文法規則を言語化することの難しさに加え、過去の人間の世界把握の形式を明らかにすることは難しい。ネイティブでない過去の文法では、普段の使用例から内省して考えることができないため、「説明はできないが自明である」ということがない。

e.g. 「た」と「ている」の違い

接続する動詞によって同義であったり異義であったりするため、説明が非常に難しい。

4. 日本語史研究の資料

(1) 非文献資料

方言・芸能・歌謡など

文献には残りにくい言語の実態や変化の過程を示し得る貴重な資料だが、文献資料に比べ言語実態との対応の純粋性は低い。また、いつ頃の言語実態と対応するかの判別が困難。

e.g. 現代の能は基本的には現代の発音で演じられるが、一部に室町時代の発音が残されている。

日月（現：ジツゲツ）→「ジツゲツ」と読むなど

また、方言はいつからその言い回しがされていたのか時代がわからないことが多い。

(2) 文献資料

非文献資料より、その時代の言語実態に純粹に対応していることが多い。

有用な文献資料の条件

- ①言語量が豊富であること（単語だけでなく文法情報などを含む）
- ②規範的すぎない資料であること（法典などは話し言葉でないので不可）
- ③原本、原本に近いもの、もしくは原本からの書承の経緯が明確な資料であること（土佐日記などは原本のコピーのコピーが残存）
- ④具体的な語形を明示する表音表記的な資料であること（万葉仮名など）

ア≧イ>ウ>エ>オの順に有用性が高いとされる。

(ア) 万葉仮名文献（奈良時代）

日本語音に対応する漢字をそのまま用いて表記しているため、中国中古音を参照することで当時の読みがそのままわかる場合が多い。

(イ) 表音文字による外国資料（室町時代～）

ローマ字文献やハングル文献

e.g. 室町時代のキリシタン資料、近代の洋学資料、朝鮮資料など

天草版平家物語の Feiqe(平家)という記載から室町時代は「へ」を「フェ」と読んでいたことがわかる。

(ウ) 片仮名文献（平安時代～）

(エ) 平仮名文献（平安時代～）

平仮名は、片仮名より「仮名遣い」という表記ルールの束縛を強く受けるため、資料としての価値はやや劣る。

ただ逆に、平仮名文献に仮名遣いの異例が現れることなどは、音声音韻変化に原因するものと考えることができる。

e.g. 「あはれ」は実際に[aΦare]と発音していたため、あ「は」れと表記していた。その後発音の変化にともないアワレと読むようになったが、書き方のみが残った。

(オ) 漢字文献

仏典や漢籍など。

しかし、実際に一番多く残っているのは漢字文献である。

第2回 上代特殊仮名遣

1. 上代特殊仮名遣とは

奈良時代の万葉仮名資料に見られる、一部の音節の特殊な書き分けのこと。

(1) 万葉集で「キ」音の表記例

君：伎、岐、吉、枳

→吉、岐が多いが紀は一度も使わない

雪：吉、企、岐、

霧：紀

→紀のみの使用

木：紀

上記の例より、現代の発音からはわからない使い分けがあることがわかる。

(2) 上代特殊仮名遣の具体的な使い分け

キヒミ/ケヘメ/コソトノヨロ、および対応する濁音において、甲乙の使い分けが存在する。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ	リ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	
ル	ユ	ム	フ	ル	ツ	ス	ク	ウ	
エ	レ	江	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	衣
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

バ	ダ	ザ	ガ
ビ	ヂ	ジ	ギ
ブ	ツ	ズ	グ
ベ	デ	ゼ	ゲ
ボ	ド	ゾ	ゴ

横の列で見ていくと覚えやすい。

※ア行の衣、ヤ行の江は10世紀頃まで残存したものであり上代特殊仮名遣とは別物

※モの書き分けは古事記でのみ確認されている

(3) 上代特殊仮名遣の研究史

この仮名遣自体はすでに江戸時代に発見されているが当時はあまり評価されず、橋本進吉により再発見されたのは大正時代である。

本居宣長『古事記伝』

古事記に使われる万葉仮名には言葉によって使われる文字に二種の書き分けがあると主張。(実際は書き分けだけでなく発音も異なることを発見していたが、一般に明らかにすると完璧な50音表が崩れしまうことを懸念し隠したのではないかという説もある)

↓

いしづかのたつまる かなづかいおくのやまじ 石塚龍麿『仮名遣奥山路』

本居宣長の弟子であり、50音表全ての音を調べ万葉仮名ではエ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロ・チ・モの15文字に使い分けがあることを示した。(発音が違うことには気づいていたが、師匠の手前発表しなかったと考えられている。)

↓

くさかとのぶたか こごんべつおんしょう 草鹿砥宣隆『古言別音鈔』

上記のような仮名遣の違いは、今は同音だが過去には異なる音であったと主張した。

↓

橋本進吉による再発見

2. 上代特殊仮名遣の意味

①極めて例外が少ない

書き写しなど伝わる過程での書き間違いを含めても、2種類の書き分けは概ね正しく模写され非常に例外が少ない。

②中国中古音と対応関係がある

中古音とは、隋・唐時代の音であり研究が進んでおり実際の発音がよく分かっているものである。万葉仮名の多くの読みが、中国中古音からきた音読みが元になっている。

事項の表を参照。

hを有声音にしたもの

ケ甲	邗	gi	(群母・脂韻4等開)
	計	kei	(見母・霽齊韻4等開)
	家	ka	(見母・麻韻2等開)
ケ乙	氣	k ^h ai	(溪母・未微韻開)
	居	ki ^h i	(見母・之韻)
	既	ki ^h i	(見母・未微韻開)
コ甲	古	ko	(見母・姥模韻)
	故	ko	(見母・暮模韻)
	胡	ho	(匣母・模韻)
コ乙	許	hiə	(曉母・語魚韻)
	巨	giə	(群母・語魚韻)
	己	ki ^h i	(見母・止之韻)

紀の発音と全く同じ
何故コと読むのか謎

キ甲	伎	giē	(群母・支韻4等開)
	岐	giē	(群母・支韻4等開)
	吉	kiēt	(見母・質真韻開)
	企	k ^h iē	(溪母・紙支韻4等開)
	棄	k ^h i	(溪母・至脂韻4等開)
	枳	kiē	(見母・紙支韻3等開)
キ乙	紀	ki ^h i	(見母・止之韻)
	奇	giē	(群母・支韻3等開)
	幾	gi ^h i	(群母・微韻開)
	歸	ki ^h i	(見母・微韻合)

最初の子音はどれも同じような感じだと思っ
て良い。

乙類：[-i][-Y-]介音と呼ばれる

甲類：[-i][-φ-](なし)

奈良時代当時にはこれらは発音が違った

k^h 有気音
子音の前に強く息を吐く

*平山久雄氏による推定音価 (『中古漢語の音韻』)

『中国文化叢書1 言語』
大修館書店 1967)

第3回 上代特殊仮名遣をめぐる未解決問題

1. 音韻論的解釈 —8母音説—

(1) 橋本進吉『古代国語の音韻について』

アプローチ法：上代特殊仮名遣の分布・語彙等からの分析

上代特殊仮名遣区別の理由：奈良時代の音韻論的対立

母音：イ列→甲乙の区別を持つものと持たないものがある

エ列→甲は純粋な e の母音とされ、乙は æ, ai の母音など様々な推測がなされている。甲乙の区別がないものもある

オ列→甲類は純粋な母音 o、乙類はもう少し中舌な音

(2) 有坂秀世『上代音韻攷』

アプローチ法：対応する万葉仮名の音価からの分析

上代特殊仮名遣区別の理由：橋本と同様

母音：イ列→甲類は i 類の母音に終わる音節を持つ万葉仮名、乙類は頭音と中心母音との間に i または u のような日音節的母音を含む

エ列→授業で言及なし（プリント参照）

オ列→授業で言及なし（プリント参照）

(3) 大野晋『上代仮名遣の研究』

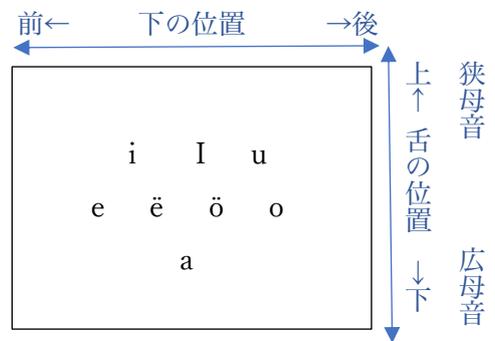
アプローチ法：橋本の解釈に準拠

上代特殊仮名遣区別の理由：橋下と同様

母音：イ列→甲類は/i/、乙類は/ i̯ /

エ列→甲類は/e/、乙類は/ ε /

オ列→甲類は/o/、乙類は/ ə /



この表の問題点

表の形が中ぶくれになっていること。本来舌を上顎に近づけるほど舌の可動域は広がり、母音の種類は多様になるはずである。これに従えば、図の上段ほどより多くの種類があり普通の発音図は逆三角形になるはずであるため、この表は矛盾している。

※イ列乙類、エ列甲類、エ列乙類は後発の合成母音

→8母音とはいっても、その一部は原初的形態ではないという説

öi→i̯, ui→i̯, ia→e, ai→ε と変化したと考えられている。

エ列を用いた語が少ないのは、そもそもエ列の発音が後発的なものであるからとした。

(4) 土井忠生『日本語の歴史』

アプローチ法：？

イ・エ列→長音に舌端が関与する（タ行やナ行など発音する際に舌をつく）子音の行では区別がない

※サ行は舌端が関与しないのに音の区別がない。これはかつてサ行は破擦音（チャチュチョなど、諸説あり）だったから。

オ列 →唇音（唇を使って発音する音）のハ（かつては pa と発音）・バ・ワ行では区別がない。奈良時代にモでの区別が消失し、平安には区別を残すのはコのみになった。

※8 母音説の弱みとして、音韻による区別があったとして、ではなぜア行には上代特殊仮名遣の区別がないのか説明できないという点がある。

2. 音声学的解釈 —5 母音説—

音の違いは、

①音韻論的対立（ミニマルペアを客観的指標とする）

②音声学的差異（相補分布と音質の共通性を客観的指標とする）

の2つに分類される。

ミニマルペア：Kamban/Kampan など1点のみ言語形式が違う2つの単語

相補分布：kamban/kanjo/kanja など音声学的には異なり重なることなく分布しているが、音韻論的対立はない状態。

相補分布をうまく使い、書き分けは全て音声学的差異によるものだと考えたのが5母音説である。

キーワード：

被覆形：アマガサ（雨）、コノハ（木）など複合語を作る際に音が変わった形

露出形：被覆形とは反対に、アメ、キなど単独語を作るときの形。

・松本^{かつみ}克己

イ列→非前舌（kgbpmの子音から始まる）の行で甲乙の区別がある。

乙類（i₂）は露出形の語幹末尾で現れる。

エ列→非前舌（kgbpmの子音から始まる）の行で甲乙の区別がある。

甲類 (i_1) は被覆形における2つの要素の結合部に、乙類 (e_2) は露出形の語幹末尾で現れる。

オ列→唇音性をもつ (pbmw) 行で区別がない。甲乙の区別のあるものは、相補分布的に区別される (必ず O_1 か O_2 のどちらを用いるか決まっていて、どちらの表記も可ということはない)。 O_2 の出現度が圧倒的に高い。

3. 音韻論音声学混合型 —6 母音論—

・服部四郎

キーワード：

口蓋化：子音を発音する際の舌の場所が硬口蓋 (上顎前の方) に近づくこと。

直音 (カ ka) → 拗音 (キャ k'a) の変化など。

イ・エ列→甲乙は子音の口蓋化の有無の差、すなわち音声学的差異による区別
オ列 → 完全な相補分布を示す訳ではなく、ミニマルペアが存在する。すなわち音韻的対立による区別

4. 音韻論的解釈+ α —7 母音説—

・森博達

イ列→音韻論的対立による区別あり

エ列→ e_1 は /e/、 e_2 は /ai/ という二重母音。エ列には母音が2種類あるとはいえない

オ列→音韻論的対立による区別あり

5. 音韻的解釈の難しさ

(1) 奈良時代の状態が上代特殊仮名遣の衰退途中であったのか、そもそもそういう形であったのか不明である。

(2) 音韻論的対立と考える場合…なぜア行に上代特殊仮名遣が見られないのか説明できない

音声的相違と考える場合…ほとんど例外のない書き分けの理由を説明できない

第4回 奈良時代語と平安時代語

1. 奈良時代語と平安時代語の違い—音韻—

(1) 上代特殊仮名遣の消失

上代特殊仮名遣の区別は、平安初期までにほぼ消滅した。「コ」についてのみ、平安時代にも残った。

(2) 音配列規則の変化

奈良時代の規則は極めて厳格であったが、平安時代になるとそのルールが弱まっていった。

奈良時代	項目	平安時代
許容しない 必ず CVCVC…と並べる	母音連続 (hiatus)	許容
語頭以外に立たない	ア行音	語頭以外にも登場
語頭に立たない	ウ行音	語頭にも立つ
語頭に立たない	濁音	語頭にも立つ
なし	イ音便 ウ音便	出現
なし	促音便 撥音便	出現

奈良時代の音配列規則

(ア) ア行音は語頭以外に立たない

→hiatus (ハイエイタス) を許容せず、CVCV…という子音母音の並びを守るため

a. 母音脱落

した (shita) + おもひ (omohi) → したもひ (shitamohi)

……後ろの言葉の母音をなくす場合

わが (waga) + いも (imoko) → わぎもこ (wagimoko)

……前の言葉の母音をなくす場合

前後どちらの母音が脱落するかの規則は不明。

b. 母音融合

なが (naga) + いき (iki) → なげき (nagēki)

……ai が合体し、ë の母音ができただけ

c. 複合語化する際に語頭に子音がつく

あめ (ame) → こ/さめ (same) よく s が加えられる

例外的に、複合語化して語頭子音が脱落する場合もある

(イ) ラ行音は語頭に立たない

r音は、母音で終わる語幹を持つ動詞に、母音で始まる接辞（可能や受け身：-aru）をつける際、母音連続を避けるために使われる。r音は重要な役割があるので、語頭なんかにつかうことはできない。

e.g. みる（miru）の語幹 mi + aru →みらる（miraru）

ラ行音の他、濁音など接着剤として使われる音は基本的に語頭には立たない。

平安時代の音配列規則

(ア) イ音便・ウ音便の出現 9世紀～

e.g. おきて（okite）→おいて（oite）

→母音連続が許容されるようになった

(イ) 語頭濁音の出現

語頭濁音が頻出するのは鎌倉時代以降だが、発生したのは平安時代。バカ、ゴミなどマイナスの意味を持つ言葉が多い。

(ウ) 撥音便（ん）・促音便（っ）の出現

e.g. えらびて（erabite）→えらんで（erannde）

10世紀になると現れる表現。促音便の出現の方が若干早い（8世紀）

2. 奈良時代語と平安時代語の違い—文法—

(1) 活用の変化

奈良時代	項目	平安時代
上二段活用	動詞	上一段活用
下二段活用	動詞	下一段活用
語尾「～け」が存在	形容詞	語尾「～け」衰退
已然形は未完成だった	形容詞	已然形「～けれ」 連体形「～ける」が確立
ミ語法が存在	形容詞	「ミ語法」が衰退
カリ活用は少ない	形容詞	カリ活用が一般化

(ア) 上二段活用→上一段活用

【奈良】干（ふ）→【平安】干る（ひる）

(イ) 下二段活用→下一段活用

【奈良】蹴（くふ）→【平安】蹴る（くゑる）

「くゑ」までが語幹

奈良時代の発音は kuwu であり、ワ行下二段活用であった。

【奈良】紅葉つ（もみつ）→【平安】紅葉づ（もみづ）

四段活用・濁らない

上二段活用・濁る

(ウ) 形容詞の変化

a. 語尾「～け甲」の衰退

未然形と已然形の両方に相当する表現であったが、平安時代には衰退した。

e.g. 悲しけば形見にせむとわが宿に……

已然形

b. 已然形「～けれ」連体形「～ける」の確立

奈良時代には係り助詞「こそ」を受ける動詞・助動詞が已然形とは決まっていなかった。奈良時代にはまだ已然形が確立されていない。

e.g. こそ—けらしも（終止）、こそ—めづらしき（連用） 万葉集

c. ミ語法の衰退

「都を遠み」、「瀬をはやみ」など、○○が△△なので～という表現が奈良時代には多く使われたが、平安時代には衰退した。

d. カリ活用の一般化

カリ活用とは、形容詞+助動詞となる際に使う文法である。そのままでは接続できないため、間に「あり」などラ行変格活用の単語を挟むことがある。

活用形	本活用	カリ活用
未然	く	から
連用	く	かり
終止	し	○
連体	き	かる
已然	けれ	○
命令	○	かれ

よく見る左のような形容詞活用表の、右の列がこのカリ活用にあたる。

(2) 助動詞の変化

a. 尊敬の「す」、継続の「ふ」の衰退・化石化

奈良時代には助動詞とされていたが、平安時代になると動詞の一部とみなされるようになった。

尊敬「す」：食す、見す など四段活用の語尾になった

継続「ふ」：向く+ふ→向かう、ねぐ+ふ→ねがう など動詞として定着

b. 特定の助動詞の形の変化

受身・可能・自発 【奈良】「ゆ・らゆ・る」→【平安】「る・らる」

打消推量 【奈良】「ましじ」→【平安】「まじ」

c. 活用の仕方の変化

平安時代以降は下の表のように「ぬ」の活用は限られているが、

活用形	本活用	補助活用
未然	(ず)	ざら
連用	ず	ざり
終止	ず	○
連体	ぬ	ざる
已然	ね	ざれ
命令	○	ざれ

かつてはヌ系の打消助動詞に未然・連用・終止形も存在していた

d. 接続の変化

「らむ」「べし」「とも」の接続

【奈良】連用形接続→【平安】終止形接続

e. 新たな助動詞の出現

使役「す・さす」、断定「なり」「たり」、推量「めり」 など

(3) 助詞の変化

a. 衰退・化石化

e.g. 連体格助詞「つ・な・だ」

(目の毛)→まつげ などとして名詞に組み込まれ、「の」「が」のみが平安以降まで残った。

主格助詞「い」→平安時代には訓点のみで使用された

終助詞「な・に・ね」奈良時代には感嘆を表していたが、平安時代には衰退

b. 語形の変化

格助詞「ゆ・ゆり・よ・より」→より など

c. 用法の変化

終助詞「こそ」に希望の用法があったが、平安時代には変化

d. 新たな助詞の出現

格助詞「へ」、終助詞「ばや」など

(4) その他

代名詞、ク語法、敬語など（プリント参照）

3. 奈良時代語と平安時代語の違い ―語構成・品詞―

(1) 被覆形・露出形（前述 p.14）の対立の衰退

名詞の活用のような、被覆形（複合語）・露出形（単独語）の語尾変化の区別は平安時代になると消失。

月夜 【奈良】つくよ→つきよ と読み方が変化した。

(2) 形容動詞の出現

奈良時代には形容動詞は存在していなかった。

【奈良】おほし（形容詞）→【平安】おほきなり（形容動詞）

「おほし」は多し、大しのどちらも同型であったが、平安時代になり「大きなり」「多かり」と形容動詞になることによって二者の区別が可能になった。

第5回 奈良—平安の相違をめぐる未解決問題

1. 相違をもたらしたもの —地域差—

- ・大和国と山背国の方言差

あまり現実的な意見とはされていない。奈良時代都が置かれた大和国と平安時代になり都が置かれた山背国は地理的に隣接しており交通も盛んであったため、方言に大きな差があったとは考えにくい。

2. 相違をもたらしたもの —平安時代初期という空白—

(1) 文学史上の「国風暗黒時代」

万葉集完成（759年）～古今和歌集出現（905）までの平安初期を中心とした100年間、日本語の文学作品が現れなかった。作品が書かれなかったわけではないが、この時期には中国に倣った漢文調のものが多い。

(2) 平安時代初期の言語資料としての訓点資料

この時期の空白を埋めるための資料として、訓点資料が注目される。

訓点が用いられる資料である漢文資料には、以下のような区分がある。

- 漢文 → 仏典…僧に読まれた
- 漢文 → 漢籍…博士家（菅原氏など）に読まれた

(3) 奈良時代語—平安初期訓点語—平安中・後期語

(ア) 奈良時代語—平安初期訓点語の共通点

- 助詞「い」が存在していた
- 未然形と已然形が未分離だった
- ク語法（用言を名詞化する働き）が存在していた
「子曰くく〜と。」という用法のみ現在まで残っている。
- 「らむ・べし」が連用形接続であった（平安中期以降は終止形接続）
- カリ活用の一般化

→平安時代初期の言語の一般的ありかたなのか、古語的表現の残存なのかは未解決

(イ) 平安初期訓点語—平安中期以降の共通点

特に和歌の言語との共通性が見られる（訓点語と散文についてはあまり今日つ性が見受けられない…）

a. 助動詞「べらなり」が存在する

「べし」は比較的新しい助動詞である。

b. 比況の助動詞「ごとし」が存在する

以下は平安中期以降散文との共通点である。

c. 断定の助動詞「なり」が存在する

※上代特殊仮名遣で見られたが平安中期以降の散文では限定的になっていった表現も、平安中期以降の和歌であればそのまま使い続けられていることから、和歌は古代語の表現を残す媒体なのではないかと言える。よって、和歌の言語との共通性を指摘しても平安時代の人々の言葉の実態とはかけはなれているのでは……?という指摘もある。

(4) 訓点資料の言語的性質見極めの難しさ

a. 訓点資料の特徴 1

訓点資料：語法については古い様式を残す一方、音声・音韻については先駆的な例を有する。

e.g. ク語法（古）↔音便・仮名遣いの乱れ（新）

b. 訓点資料の特徴 2

同じ意味を表すにも関わらず、漢文訓読用と和文用の2つの言葉が用意されている例が多い。

e.g. 【漢文訓読語】たがひに—【和文語】かたみに

→奈良時代語—平安時代中期語の変化を連続的と捉えられる例もあるが、平安初期訓点后を考慮すると、奈良時代語—平安時代語の間で劇的な変化があったとしか見られない事象が多い。

3. 相違をもたらしたもの —奈良時代資料の制約—

(1) 奈良時代語の資料

和歌・歌謡など、圧倒的に韻文資料に偏っている。

【韻文】古事記、日本書紀、風土記、万葉集

万葉集も全ての読みが判明しているわけではなく、万葉仮名が使われ読みが確実なのはその内7巻ほど。

【散文】正倉院万葉仮名文書、二条大路木簡 この2点のみ

飛鳥京苑池跡遺跡出土刻書土器 これもあるが、漢文風の表記を含む

(2) 韻文資料の言語的特徴

a. 敬語を含まない

b. 漢語を含まない

c. 韻文専用の語彙を使用する

e.g. たづ（鶴）、かはず（蛙）など

我々の知る奈良時代語自体が和歌用のもので、実用的な言語ではなかったのではないか？という意見がある。

4. 平安時代語の捉え方

(1) 平安時代語の多層性と資料の限界

散文文学では、会話文・草子地・地の文など様々な性質を持つ言語表現を含んでおり、その語法や音を一概に捉えることはできない。

(2) 平安時代語が完成形であるという偏見

和歌あるいは散文文学の言語を古代語の完成形とみなし、他の言語をそれに従属させる方法で考えてしまっているのではないかという指摘。

(3) 奈良語—平安語に劇的な変化があったのなら、その原因は何か

(1)、(2)の問題を考慮した上でなお奈良時代語と平安時代語の間に劇的な変化があったことを認めるならば、その原因は結局どこにあるのかということはまだ未解決である。

第6回 片仮名・平仮名の誕生

片仮名・平仮名の誕生は書き言葉のみに影響するようなものではなく、日本語全般に関して非常に重要な出来事である。

仮名の表記は CV を 1 単位とし、必然的に CVCVCV…となるため子音で終わっていた語の存在をゆるさなくなった。これにより、活用の変化なども生まれる。

cvc vcv…

e.g. 【奈良】 kak | azu というように、語幹が子音で終わることも
 語幹 活用 許されていた。しかし、平安になると仮
名の誕生により、～azu といった活用の捉え方がなくなっていった。

1. 片仮名の誕生と発展

(1) 訓点の発達と片仮名の発生

(ア) 句切点・返点のみの訓点 8世紀～

由五 東： 間中 初二 句・ 為四 一句 ： 故也	為 す 故 の 由 な り。 問 の 中 、 初 め の 二 句 を 東 ね て 一 句 を
---	--

漢文の訓点のように、・→一、：→二など読む順番を示した。送り仮名はまだ登場していない。

(イ) 万葉仮名による訓点 8世紀末頃～

同じころ、(ア)とはまた別に万葉仮名を用いて漢文の行間に訓法を記入したものがある。この頃の万葉仮名の使用は、以下のように分類できる。

全音仮名：以=イ

略音仮名：安=ア

二合仮名：相模=さがみ saŋ+a (本来なかった母音を足して読ませる)

連合仮名：奈伎和多里南牟=なきわたりなむ nam+u

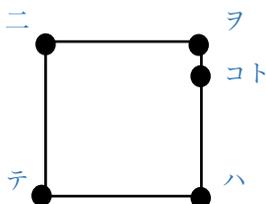
平安時代になると、万葉仮名本来の用法をはみ出すような形でも使われ始める。

右図：聖語藏本 おうくつまらきょう 央掘魔羅經

	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	和	良	也		ハ	奈	七	左 佐 坐	可	阿
	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		リ		三 義	比 非	ニ 尔	矢 千	四 之	木 毛	伊 佐
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	由 之	ム 元				頁	口 久	宇
	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	
	惠		迄	女	つ	根		世	介	
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	乎		与	母 え			ト 止	曾 メ	去 其	

(ウ) フコト点+仮名による訓点 8世紀頃～

詳細なフコト点の種類はプリント参照。



上記の第五群点のように、漢字の決まった位置に決まった点・線を書くことで、読みを表す手法である。

中田祝夫によれば、フコト点は8種類に分類できるとされた。また、テニオハのもとになったとされている。

(2) 片仮名体系の社会化と成熟

平安中期になると、訓点には以下のような変化が生じた。

- 従来、訓点のついた本は南部の古い宗派のものが多かったが、寛平年間(890年頃)になると天台宗、その後真言宗など新しい文献も訓点がつけられるようになった。
- 第五群点、第八群点という新しい形式のフコト点
- フコト点の形式が固定化し、異なる書籍でも細部まで同様の形式で使われるようになった。

平安後期になるとさらにフコト点の統一は進み、各宗派ごとにフコト点の語法が統一された。フコト点を調べることによって、どの宗派の人間が書き加えたのか推定することもできるようになる。この頃から、古い本から新しい本にフコト点を書き写す移点という作業が広く行われるようになった。

資料によりバラバラだったヲコト点が次第に統一されていく。

→ヲコト点が社会性を帯びてくる

個人的→他人/同宗派の人にも読まれるように変化

(3) 片仮名文の発生

	返読	片仮名の小書き	自立語の片仮名書き
ア 訓点由来	○→△・×	○	×
イ 宣命体由来	×	○	○
ウ 平仮名文由来	×	×	○

(ア) 訓点由来のもの

『金光明最勝王経』など

本来漢文に訓読をつけるというコンセプトで書かれた

→返読を前提とする漢字仮名混じり文

日本語の語順に引きずられ、漢字仮名混じり文が一部非返読化した。

(イ) 宣命体由来のもの

院政期以降に出現し、音楽資料→説話資料という順で広まった。

本来文章ではなく、宣命体という天皇の口頭による命令が元になっているため、返読はしない。

天皇の祝詞は現在もこの書き方をしている。

(ウ) 平仮名文由来のもの

10世紀中頃以降に出現、和歌から始まった。

平仮名由来のもの大きな特徴として、自立語も片仮名を用いて書かれるという性質がある。

2. 平仮名の誕生

片仮名の誕生より半世紀ほど遅れている。

(1) 出土資料

藤原良相邸跡出土墨書土器（京都）9世紀後半

ケカチ遺跡出土刻書土器（山梨）10世紀中頃

→9世紀後半に生まれた平仮名が、10世紀中頃には地方にも伝わっていたことを示している。

(2) 伝世資料

土の中から出てきたものではなく、保存されてきた書物など。

a. 有年申文^{ありとしもうしぶみ} 9世紀中頃

→漢字を元に誕生している。内容はよくわかっていない。

b. 円珍病中言上状 9世紀末

c. 因幡酷使解案紙背消息

→漢文・平仮名混じりのもの。文字をつなげて書く「連綿」とよばれる手法が用いられている。

d. 土左日記

→原本は残っていないが写本が残存。当時は漢字と混交したのものも、平仮名ばかりのものも存在したが10世紀頃には完成した形ができあがった。

第7回 平仮名・片仮名の誕生をめぐる未解決問題

1. 片仮名の誕生・発展の時期と背景

片仮名は、漢文に訓点をつけるために生まれた。なぜその時期に生まれたのか考えると、片仮名誕生の前提として日本人が漢文をそのまま読むのではなく訓読をするようになったという事実が鍵になっているとわかる。

(1) 訓読と訓点・片仮名の発生の時期と背景

(ア) 訓読の発生

語単位では5世紀末～

6世紀中頃以降、漢字の訓読みが始まっていた。

文レベルでは、7世紀後半以降漢文を基として訓読する作業が確立した。

ただし、仏典のように漢文の書物に直接書き込んだものが現れるのは奈良よりもっと後である。テキストに直接書き込んで本を汚すのはまだ抵抗があったのではないかと考えられている。

それまではテキストには書き込まず木簡に訓読をメモしていた。

(イ) 訓点・片仮名の発生

背景：文レベルでの漢文の訓読が発達（7世紀後半以降）

国家仏教体制の変質

→桓武天皇による平安京への遷都からもわかるように、奈良時代国家仏教とされ国を守るためのものであった仏教は平安時代になると政治と切り離され学問として取り扱われるようになった。

→寺は学問をする場所へ変化。仏典の研究をする中で、読み上げるだけでなく内容理解のため訓点を書き込むようになった？

(2) 片仮名の成熟と訓点の社会化（10世紀以降）

訓点を書き込んで書物を汚すのはタブーという認識がなくなっていた。

背景：894年遣唐使廃止

→中国で直接中国語を学ぶ者が激減する。

漢文読解能力の低下に伴って、訓点を施して読むことの重要性が増した。それまでは漢文をそのまま読めないという証であり人に見せるの

は恥ずかしいようなものであった訓点が、加点行為の一般化により個人的（すぐ消える白墨）→共有されうるもの（朱点・墨点）へ変化

9世紀になると片仮名が急に整って統一され、鎌倉時代になると著者本人がもともと漢文を書く際に訓点をつけて書くようになった。

2. 平仮名の誕生・発展の時期と背景

片仮名の誕生の解明より、平仮名誕生の解明の方が難しい。どこで生み出されたのか？なぜ9世紀以前には生まれ得なかったのか？がよくわかっていない。

(1) 平仮名発生の場合

(ア) 万葉仮名の用途

a. 散文（通信文）

正倉院万葉仮名文書（8世紀半）

→甲乙2通が残る私的な手紙。ほとんど全てが万葉仮名で書かれている。

b. 和歌

歌木簡

→古今和歌集の仮名序にもある「なにはづに～」という歌を記した木簡が各地から見つかっている。子供の仮名練習に使われたと考えられている。

(2) 初期平仮名資料の例

a. 散文（通信文）

有年申文（8世紀半）など

→漢文体との交用

万葉仮名文専用のもも見つかっている。

b. 和歌

「はル部止左くや古乃はな（はるべとさくやこのはな）」と記した木簡が各地で見つかっている。

醍醐寺五重塔天井板落書にある和歌にも平仮名が使われている。

平仮名の出現においては、和歌より散文の方が先行している。

3. 平仮名の誕生・発展時期と背景に関する疑問

(1) 万葉仮名→平仮名の移行は散文から始まったのか？和歌からか？

現存例から考えると平仮名の使用は散文の方がわずかに早い。通信文において私的通信のための文字が発達し平仮名となったと考えたいが、和歌が先行するという研究者もいるため未解決。

c.f. 西アフリカのリベリア（公用語：英語）で用いられているヴァイ文字は、ラテン語を筆記用に変形させたものであり、誕生方法としては平仮名に似ていると考えられる。（ただし、ヴァイ文字は1833年に人為的に作られたなど、日本語との差異も多い）

→漢文という公用語を用いるほどでもない私的な場合のために平仮名が生まれた？

(2) 万葉仮名→平仮名の移行はなぜ9世紀後半に起こったか？正倉院万葉仮名文書から数えても100年ほどの時間が経っているのはなぜか？

中国の草書の流行の影響を指摘する人もいるが、草書は連綿をしないため妥当な考えとは言えない（by 矢田教授）。

日常的な書写の材料が木簡（すぐにじむ）→紙（サラサラ書ける）へと変化したことで、連綿が可能になり平仮名が生まれたのではないか（教授の持論）。

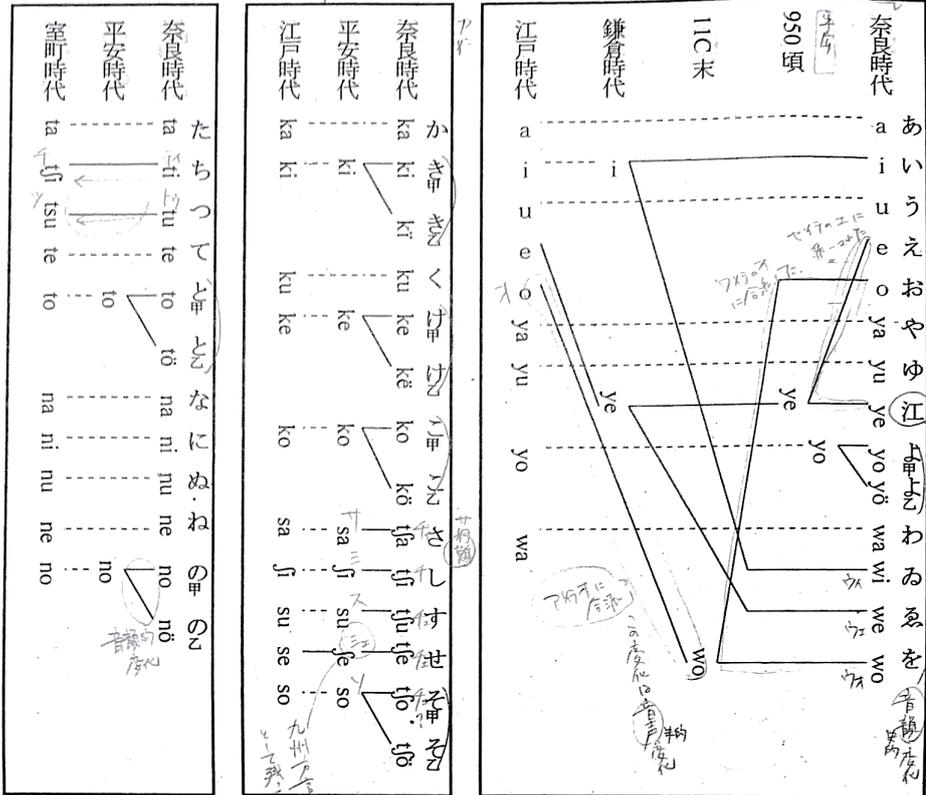
第8回 平安時代以降の音声音韻変化と未解決問題

1. 日本語音声音韻史の概略

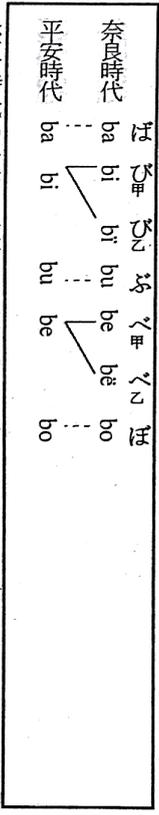
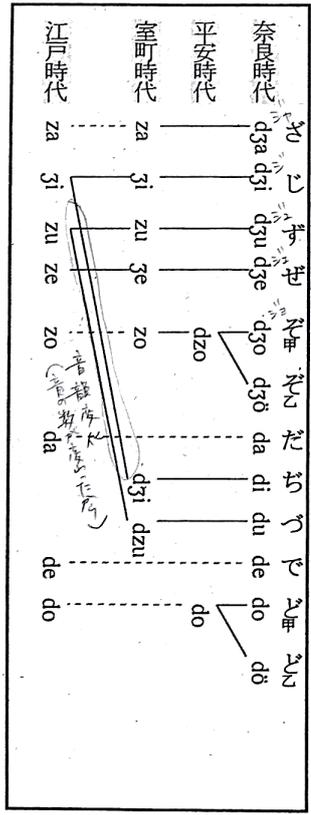
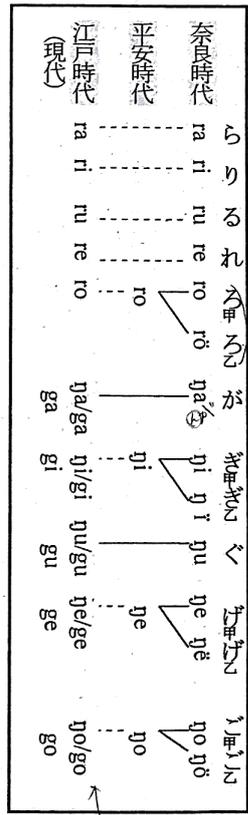
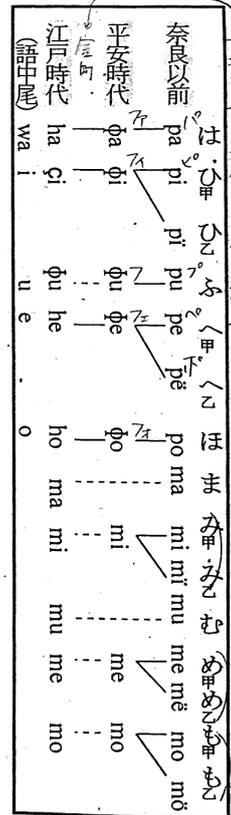
ことばと文学Ⅲ「日本語史の未解決問題」-08 【東京大学教養学部 2019A / 矢田】2019.12.10

VIII・平安時代以降の音声音韻変化と未解決問題

1、日本語音声音韻史の概略



下行ヤ行 フレハ易と移推
 下行イ段 (y) は奈良時代にはない
 の行ウ段 (w) の音は、(y) と見らるる
 体系的
 あらる



※各時代の音価の推定には諸説ある場合がある。サ行子音などは特に異説が多い。

2. ア・ヤ行のエの合流

途中までは区別されていたが、10世紀途中でヤ行の方に収束した。

(1) 区別が残存している例

みなものしたごうしゅう
『源順集』杳冠歌 (967年)

「あめ つち ほし そら…… えのえを なれゐて」

ア行のエ、ヤ行の江の区別は当時はもう怪しかったが、「あめつち」という言葉ができた時にはまだ区別が残っていたとわかる。

(2) 区別が消失した例

源為憲『くちずさみ口遊』 (970年)

「田居に出て……藻草干せよ え船懸けぬ」

970年頃にはもうすっかりア行エとヤ行江の区別はなくなっていた。

(1) ~ (2) の間の時期に区別が失われたと考えられる。

(3) 正確な発音を読み取れる例

『金光明最勝王経音義』 (1079年)

いろは歌と50音表がついており、しつたん悉曇の発音を示す際に日本語との対応が記されている。

悉曇とは、インドの高貴な人が用いる梵字のことである。真言宗など密教では、特にこの悉曇で書かれた原本（陀羅尼）が重視された。

3. 平安時代初期の音価と悉曇資料

(1) 円仁『在唐記』

悉曇音声を伝授された際に記したメモと考えられている。

a. サ行音

ㄱ ca[tʃa] : 本郷佐字音勢呼之

→本郷=日本、佐=さ

チャーという発音の文字であるため、当時の日本語ではサをチャと発音していたと読み取れる。

b. ハ行音

ㄏ ha : 以大唐賀字音勢呼之

→ハ音は中国語で説明されているため、日本語にはない音だったと考えられる。

ㄆ pa : 唇音。以本郷波字音。……皆加唇音。

→日本語の波が対応するとされていることから、当時の日本語ではハをパと読んでいたことがわかる。ただし少し唇音が弱まるということで、実際はプア程度の音であっただろう。

(2) 『悉曇口伝』心蓮

日本語の母音の説明が成されている。以下は現代語訳を記す。

「エについては、イの口でイと言ひ、最後に下の先を下げなさい」

→ア行エとヤ行江が合体した後、ヤ行江（イエ）に統一されたことがわかる。

「ヲは、ウの口でウと言ひ、最後に唇を開く」

→ヲはウオと発音していたことがわかる。ア行オとワ行ヲが合体し、ワ行の方に統一されたと言える。

3. ア行オ・ワ行ヲの合流

(1) 『悉曇要集録』寛智

50音表が書かれている。

「オコソトノ ホモヨロ」と記されており、ヲを欠いているためア行オとワ行ヲが合流したことがわかる。

(2) 仮名遣いの乱れ

掛詞の中で、本来違う文字だが一緒にしてよいとする人がでてくる。

ア行オ、ワ行ヲの書き間違いが多い。

「おほはらのべの…… つみおかし あるものならば」

→罪犯す（ヲカス）・摘み置かす（オカス）という異なる表記の単語であるが、掛詞として同様に扱ってしまっている。

4. ハ行転呼音

母をハワと読むなど、語頭以外のハ行をワ行として発音する語法。

(1) 50 音図

「比 ヒホハヘフ/キヲワエウ」

→ハ行の音として、「いをわえう」という音も並べて書かれている。

ハ行は文字行そう書かれても、ワ行音となることが一般的だとわかる。

(2) 仮名遣いの乱れ

「うきめをば…… あはたつ」→あわたつ、と読む

「難波潟…… たえず消ぬべし」→本来「堪へず」と書く。ハ行とア行、ヤ行がごっちゃになってしまっている。

5. 音声・音韻変化に関する未解決問題

(1) なぜその音韻変化が起こり得たか

これに関してはおおよそ説明がつく。

a. ア行ヤ行のエの合流

そもそもエという母音は後からできたものであり、ア・ヤ行「エ」を含む語は少ない。機能負担が大きく、2つのうちで用例の多い方のヤ行に収束した。

機能負担：2つの要素を区別しておくためにかかる手間のこと

区別にかかる手間 > 区別で得られる利益 となった際、区別が消失する。

b. オ・ヲの合流

[wo]は[uo]に音価が近く、かつ o と u は共に後舌であり聞こえが近かった。

c. ハ行子音の変化

$[p] \rightarrow [ɸ] \rightarrow [h, c, \Phi]$ のように唇音退化がおこった。ハ行転呼音 $[\Phi] \rightarrow [w]$ も同様。

d. ハ行転呼音

母音に挟まれたことにより同化現象がおこった。

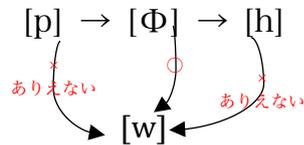
同化現象：周りの音の影響を受け、周りに近い音になろうとすること。

(2) なぜその時期にこれらの変化が起きなければならなかったか？

これはほとんど説明がついていない。例外的なサ行についてはプリント参照

・ハ行転呼音が起こった時期の理由

林史典：ハ行点呼音はハ行子音が[p]→[Φ]に変化すると同時に母音間での同化（有声音化）がそれをさらに[w]へと変化させた、と主張。



ハ行転呼音は p→Φが終わった後、Φ→h と同時に起きた。

第9回 平安時代以降の文法変化と未解決問題

本回に関しては、授業自体に時間がなく配布プリントを超える説明はほとんどなかったため、各自プリントを参照してください。さぼってすみません。

本シケプリは、事項の授業課題・試験問題の写真で終わりとなります。
最後までご覧くださりありがとうございました。

発音記号活字参考

プログレッシブ和英

<https://japanknowledge.com/contents/progre4j2e/hanrei10.html>

大辞林

<http://daijirin.dual-d.net/extra/nihongoon.html>

ウムラウト äüëö

ことばと文学Ⅲ 【2019A・火5/矢田勉】
期末試験問題

【注意】

- 1、問題は全部で10問です。①～⑤は解答用紙の表面に、⑥～⑩は裏面に解答すること。
- 2、それぞれの問いについては、初めに設問番号（丸付き数字）を記したのち、3行以内で簡潔に記述すること。

3、問いの順番通りに記載すること。問いと問いの間には1行以上の空行を設けること。解答しない設問については、設問番号のみを記して、4行空けて次の問いの解答を記載すること。

【設問】以下の①～⑩を、簡潔に説明しなさい。

- ① 万葉仮名文献が、日本語史研究の資料として平仮名・片仮名文献より優れている理由
- ② 「音声」と「音韻」のそれぞれの定義
- ③ 「上代特殊仮名遣」とはどういう言語事象か

④ 奈良時代語8母音説の説としての弱さ

⑤ 奈良時代語の音配列規則

【以上①～⑤は解答用紙の表面に記述すること】

⑥ 平安時代初期の日本語史資料

⑦ 片仮名の発生と体系としての成熟の背景

⑧ 発生初期の平仮名の用途

⑨ 平安時代語の音価（実際の発音のあり方）はどのようにして分かるか

⑩ 二段活用の一段化が起こった理由

【以上⑥～⑩は解答用紙の表面に記述すること】

注意：以下のことを怠った場合には、不正行為として取り扱われることがある。

- ・試験中は、本人確認のため、常に学生証を机の上に置いて受験すること。
- ・机の上には、学生証の他、筆記用具、計時機能だけの時計（通信機能があるものは不可）、袋から出したティッシュペーパー、教員から特に認められた物以外は置かないこと。これ以外の物（筆人を含む）は見えないよう鞆等に収納した上で、机の中、脇の椅子または床の上に置くこと。
- ・携帯電話等は必ず電源を切った状態（マナーモード不可）で鞆等にする。また、携帯電話等を時計や電卓の代わりに使用してはならない。
- ・解答用紙や計算用紙は所定の枚数を超えて取ってはならない。また、答案を提出せずに持ち帰ってはならない。
- ・試験監督者並びに科目担当教員の試験に関する指示に従うこと。明らかに試験に支障を来たす行為は行ってはならない。